

保険薬局における臨床検査値の活用について

本田 雅志

総合メディカル株式会社 そうごう薬局天神中央店

そうごう薬局天神中央店（以下、当薬局）では、2012年より患者担当制を導入し、がんに関する専門知識をもった薬剤師が継続してがん患者を対応している。がん治療中の患者に対して、「患者にとって最適な治療の効果を最大限に引き出し、副作用を最小限に抑えることで治療の継続を支援すること」を目標としてケアを行っている。

当薬局では、月に約300名のがん患者が来局している。検査値が表示されている処方箋の応需は少なく、患者が検査表として病院スタッフから手渡しされたものを利用する必要があった。しかし、取り組みを始めた当初は、検査表の確認もほとんど行えず、抗がん剤ごとにどの検査項目を確認すれば良いのかも不透明な状態であった。そこで検査値確認を含めた外来がん薬物治療患者の対応に必要な確認項目をスタッフ間で共通化し、標準的な応対手順を定めることをひとつの目的として「外来がん薬物治療患者における保険薬局クリニカルパス」を作成し、運用してきた。運用により抗がん剤ごとに確認すべきアドヒアランスや副作用、支持療法薬の有無や検査表の確認を着実にを行い、アセスメントを実施できるようになった。

患者の検査表確認を行う中で、「この項目の意味が分からない」などの質問をされることが幾度もあり、その質問を掘り下げると「生活で何か気をつけることはあるか」「目に見えない副作用が出ていないか」などの不安な気持ちを抱えていることが分かった。これらの不安に対して、ただ型通りの説明を行うのではなく、生活者としての患者に寄り添ったアドバイスを行うことや、必要であれば病院スタッフと連携し介入を行なうことで、患者の信頼をより得られると考えられる。それにより、患者が薬剤師に教えてくれる情報の量・質が増加し、また薬剤師からのアドバイスを受け容れやすくなる関係性となることで、最適なケアの実現に一步近づくと考えられる。今回は、生活状況へのアドバイスを行了った事例や病院との情報共有により詳細な検査に至った事例を紹介したい。

臨床検査値は、投与量の個別適正化や重篤な副作用の回避・早期発見のために重要な指標であるが、目の前の患者の訴えや思い、生活状況などの情報と併せることで外来がん治療患者へのケアを更に深められると思われる。そのためには、各種検査値についての知識を向上させることに加え、各施設それぞれに最適な応対手順を自分たちで検討し、共通化することが有用と考えられる。